

化学の楽しさ 小説で伝える

薬にちなんだ謎解きが人気

化学を題材に扱った斬新なストーリーで活躍する薬学出身の小説家がいる。製薬企業の研究者を経て、昨年から専業作家に転身した喜多喜久(きた・よしひさ)さん。30歳を前に趣味で小説の執筆を始め、「5年で応募作が受賞しなかったら小説を書くのを辞める」と心に誓い、2作目の『ラブ・ケミストリー』で宝島社から『このミステリーがすごい!』大賞・優秀賞を受賞する栄誉を授かった。「化学にもっと親しみを」という思いで生み出した作品群は、大学の研究室を舞台に有機合成といった化学、薬にちなんだ謎解きが作中に登場するなど、エンターテインメント小説として面白くて分かりやすいと評判だ。化学との出会いから製薬企業の研究者になった喜多さんだが、いつしか薬を創るよりも、化学の楽しさを伝える作家業にのめり込む。「小さくてもいいから、“1日1アイデア”を創出すること」を日課にし、薬創りで用いる化合物ライブラリーならぬ、自分だけのアイデアのライブラリーを積み上げ、アイデア全体のおよそ1%の確率で、年3冊、合計26冊の小説を生み出してきた。アイデアを出すことを楽しむアイデアマン、喜多さんの生き方を追った。



薬学出身の小説家

喜多 喜久さん

喜多喜久さん。39歳。作家業を始めるに当たって、喜多の名字にちなみ、縁起の良い名前として「喜久」を選んだ。喜ぶが二つも入る名前はめったにない、そんな喜多さんのルーツは徳島県。高校卒業後、東京大学理科I類に入学し、生まれ故郷の徳島から上京した。

東大では2年の後期に学部を選択するルールがある。通常、理科I類では、工学部や理学部に進む学

生が多いが、喜多さんが薬学部を選んだのは、化学という学問を身近に感じたからだ。

高校時代はどちらかといえば暗記科目という感覚で化学に興味を感じなかったというが、「大学の授業では結果に対して、なぜそうなるのかの理屈を教

えてくれるようになり、体系立てて学ぶことの価値を感じることができた」と急に親しみが沸いた。学部4年生へと進んでからは、薬創りに関連した研究室に入り、修士課程を経て2003年には製薬企業に入社し、研究者としての生活が始まった。

研究者時代に創作活動開始

2作目で「このミス」大賞・優秀賞

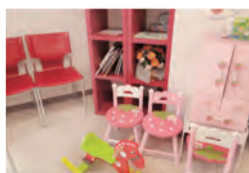
アレルギー系薬物で大量合成法の確立、不安定な中間体の不純物の合成と、研究者として創薬の様々

なプロセスを経験する生活に明け暮れた。人生の転(2ページへ続く)

株式会社プチファーマシスト

関西圏を中心に全国へオレンジ・元気薬局を展開

初年度年収 450~550万 希望エリアでの勤務OK!働き方次第で高収入も可能!あなたの頑張りを評価します

新卒生限定10泊12日
ハワイ研修実施!

インターンシップ参加者募集

オレンジ薬局

検索

薬剤師
国家試験
対策.com薬剤師を目指す薬学生のための
国家試験対策支援サイトです

ご登録・ご利用完全無料

be89314

検索